

(様式2)

令和5年度・令和6年度「ちばっ子の学び変革」推進事業研究成果報告書

鎌ヶ谷市立第二中学校

研究主題

対象や目的に応じて自分の考えを書くことができる生徒の育成

1 学校の概要

本校は、全校生徒数650名、22学級、職員数59名の学校である。学校教育目標は、「心豊かで、たくましく生きる生徒の育成」であり、職員は、知・徳・体の基礎を身に付け、自己の将来と郷土の豊かな将来を創造する生徒を育てることを経営の重点としている。生徒は、非常に落ち着いており、授業にも真面目に取り組んでいる生徒が多い。

2 研究の概要

(1) 児童生徒の実態と課題

令和5年度の全国学力・学習状況調査の国語の平均正答率を見ると、全体的には千葉県・全国の平均正答率と同程度である。選択式や短答式の正答率で見ても、千葉県・全国の平均と同程度であるが、記述式の正答率は千葉県と全国の平均正答率をやや下回っている。以下、問題形式ごとの分析を記す。

選択式の問題については、「レポートの下書きの一部について、文の一部を直す意図として適切なものを選択する」問題の正答率が低い。この問題の趣旨が「読み手の立場に立って、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる」ことから、相手を意識した文章の作成や推敲が苦手であることが推測される。他の問題については、概ね全国平均と比較して正答率は上回っている。

短答式の問題については、「文脈に即して漢字を正しく書くことができるかどうかをみる」問題や「古典の原文と現代語の文章とを対応させて内容を捉えることができるかどうかをみる」問題の正答率が低い。漢字の使用については、ICT機器が身の周りに溢れている日常生活の中にあって、変換することはあっても書くことはしないという実態が浮かび上がってくる。また、古典の問題については正答率が7割ほどであることから、資料を比較し、必要な内容を探し出すことが苦手であることが推測される。

記述式の問題については、「自分がこれからどのように本を読みたいかについて、読んだ文章を参考にして、知識や経験に触れながら書く」問題や、「現代語で書かれた『竹取物語』のどこがどのように工夫されているかについて、古典と比較して書く」問題の正答率が低い。両問題に共通している力として、複数の文章を読み、その内容を踏まえて自分の考えを記述することが挙げられる。ここには「複数の文章を読む」「内容を理解する」「自分の考えを形成する」「考えを記述する」「他者に伝わるようにまとめる」など、いくつかの能力が要求されている。二つ目に挙げた設問については無解答率が2割を超えていることから、これらの能力を同時に発揮することは本校の生徒にとって大きな課題であると言える。

生徒質問調査について、「1、2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか」という質問や「国語の授業で、自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にするために必要な情報を資料から引用して書いていますか」という質問は、肯定的な回答が全国平均を上回っている。しかし「授業で学んだことを、ほかの学習で生かしていますか」という質問については、肯定的な回答が千葉県・全国平均を共に下回っている。このことから、教科の授業で学習したことが他の教科に活用できていないことが推測される。

(2) 学力向上のための取組

(1) で述べたことを踏まえ、本校では次のような仮説を立てた。

仮説 1

国語の授業の中で、文章の書き方や文章を書く上での表現の工夫を指導し、自分の考えを他者に書いて伝える課題を設定することにより、目的に応じた自分の考えを書く能力が高まるだろう。

仮説 2

振り返りシートを活用し、その時間で学習した内容や成果・課題などを自分の言葉でまとめることで、書く行為そのものへの抵抗感が軽減されるだろう。またこの活動を継続して行えば、「学習事項を再認識する」「学習事項への自分なりのまとめを考える」「考えを記述する」など、複数の能力を同時に発揮する力が高まるだろう。

上記の仮説を検証するために令和5年度から以下の取組を継続的に実践した。

朝読書の導入

本校は昨年度から全校統一で朝読書を実施している。「一定量の文章を読んだり、触れたりすること」を目的とし、読書の際に読む本として適切なものを国語科教員や学校司書が提示し、毎朝10分間読書する習慣付けを行った。また、本年度は「読書カード」を用いて、朝読書や日々の読書活動で読んだ本についての記録を残す試みを行った。作者名や出版社名などに加え、作品の読後感想を書くことで、読書活動そのものへの価値付けを高めるねらいのもと実施した。

朝学習の実施

昨年度は朝礼後に毎日読書活動を行っていたが、本年度はこれに加え、記述力の向上を目的に文章記述の時間も設けた。具体的には1ヶ月の中で3週間を読書、1週間を記述の週として設定し、学年ごとに実態に応じた記述課題を作成した。記述課題はスモールステップ形式とし、5日間で記述が完成するような仕様とした。

振り返りシート（自己評価カード）の活用

国語科で統一した振り返りシートを活用し、授業で学習した内容について「今日の学習でできたこと、分かったこと」や「今日の授業でできなかったこと、分からなかったこと」、「今日の授業の中で生じた疑問」、「次回の授業に向けて、自分が取り組んでおこうと思うこと（予習・復習）」などを記述させた。継続的にを行い、書くことへの抵抗感の軽減を図るとともに学習事項の振り返りの場を設定した。

文章構成の仕方や目的を意識した記述の指導

各学年の国語の授業において、文章構成の型や接続する語句などを繰り返し指導するとともに、記述をさせる際に対象や目的を明確にした文章を書くよう指導した。また、生徒が行う活動の例として教師見本を作成した。

記述による課題の設定

単元の中に「自分の考えを書いたり、学習のまとめを自分の言葉で書き表す」活動を取り入れたり、定期テストにおいて短文での記述や作文の問題を設定したりした。また、直接書くことに抵抗感を抱いている生徒を想定し、市から貸与されているタブレット端末の文書作成ソフトを用いての記述活動も取り入れた。

校内研究授業の実践

学期に一度、東葛飾教育事務所の指導主事や鎌ヶ谷市教育委員会の指導主事を講師として招き、「書く」活動や「読む」活動の実践について指導・助言を受けた。

1 学期 令和6年6月4日（火）

3年 単元名「伝承遊びを説明しよう」

教材名「具体例をもとに説明文を書く」

講師：鎌ヶ谷市教育委員会生涯学習部学校教育課指導室 指導主事

2 学期 令和6年10月28日（月）

2年 単元名「自分の思いを相手に伝える短歌を作ろう」

教材名「短歌の味わい」

講師：鎌ヶ谷市教育委員会生涯学習部学校教育課指導室 指導主事

3 学期 令和7年2月12日（水）

2年 単元名「3分後に〇〇な結末 ―ショートショートに挑戦―」

教材名「「連作ショートショート」を書く」

講師：千葉県教育庁東葛飾教育事務所指導室 指導主事

（3）加配教員（学習サポーターを含む）の活用

学習サポーターは、主として生徒の作成した作文の添削指導を担当した。学習サポーターを活用することで、基本的な文法上の誤りから文章構成に至る記述全般に関する、生徒の作文への細かな添削が可能となった。この指導によって生徒自身がどこを改善すればよいのかを意識することができた。

3 研究の成果

- ・朝読書を実施したことにより、生徒が文章に触れる機会が増加し、文章を読む速度が向上した。また、読書をする機会が増加したことにより、昨年度以前より学校図書館の利用生徒も増加した。具体的には2022年の数値を1とした時、2023年は約1.75倍、2024年は約1.98倍に増加した。
- ・振り返りシートを活用したことで、「短い文章を書けるようになった」「振り返りシートを具体的

4 今後の課題

- ・読書活動を継続した結果、図書室の貸し出し冊数や読む力の向上を体感した生徒の増加につながった。しかし、書く機会の増加の観点から導入した読書カードについては、活動時間の確保や読書活動と並行することの困難さから成果があまり見られなかった。書く活動は国語科の授業内で十分に担保できたことを鑑みると、朝読書の活動に読書カードのような書く活動を付帯させることは難しいのではないかと考える。
- ・12月に3学年の生徒を対象に実施したアンケートの、「国語のテスト（定期テストや実力テスト）の問題では、解答を文章で書く問題があります。それらの問題について、あなたはどのように解答していますか。」という質問において半数弱の生徒が「問題によって、解答しなかったり、解答を書くことを途中であきらめたりすることがある」と回答した。理由として多く挙げられたのは「書く時間が足りないこと」と「書く内容が分からないこと」である。時間については日頃の記述活動の際に時間設定をして練習することで状況の改善が図れると考える。また、内容については、設問を正しく読み取る読解力を平時の活動から意識させることで改善できるだろう。いずれにしても日々の授業内で養える力であることから、教師がこれらの点についても意識しながら授業展開や課題設定を行っていく必要があると考える。
- ・今年度の取組によって「自分の考えを」「目的や対象に応じて」書くという部分については一定の成果を得ることができた。しかし、この成果は継続した指導の上にあるものであり、国語科だけでなく、他教科や領域においても継続して指導していく必要がある。職員の入れ替わりが多い本校において、学年ごとの既習事項を引き継ぐことはもちろんだが、「どのような活動を行ったか」という活動内容や活動実践そのものについても引き継いでいくことで、生徒たちが円滑に学習することが可能となり、ひいては生徒の資質・能力の向上につながるであろう。